

**いつか世界を救うために**  
—クオリディア・コード—

橘 公司  
(Speakeasy)

---



ファンタジア文庫

2343

口絵・本文イラスト はいむらきよたか

いつか世界を救うために

— クオリティア・コード —

橘公司

(Speakeasy)

Illustration

はいむらきよたか

## 序章／1 観察者

物事は全て観察から始まる。

それは、紫乃宮晶——シノが常々心の中に留めていることであった。

人間は環境の情報の大半を視覚から得ているという。その割合は、一説には八割とも九割とも言われている。

ならば、特定の対象を詳しく知ろうとしたとき、最初にやることは決まっていた。

そう——『見る』ことだ。

百聞は一見に如かず。一度見ることは、百度聞くことに勝る。

冷静に考えてみればとんでもないレートであるが、その言葉が大きさでないことは、通常の社会生活を送っている人間であれば誰でも理解できるに違いなかった。

それほどに、視覚の役割は大きい。人間の持ちうる他の五感——嗅覚も味覚も触覚も、速やかに対象の情報を得るといふ一点においては視覚に劣る。

だから、シノは見えていた。

通気口の中から。

女の子の部屋を。

「……………」

息をひそめながら、通気口の金網越しに部屋の中を見下ろす。

高級ホテルの一室のような、広い部屋である。床には塵一つ落ちていないのだが、その代わりと言わんばかりに、天蓋付きの大きなベッドや、精緻な意匠の施された棚の上には、ぬいぐるみや小物などが所狭しと並べられていた。

きつと、部屋の主とは別の人物が掃除をしているのだろう。片付けはするものの、家主の許可なく物を処分するわけにもいかないため、棚の上が誕生日ケーキのようにデコレーションされてしまっているのだ。

「——ふんふふーん、ふんふんふんふーん」

シノが部屋の様子を窺っていると、へたくそな鼻歌を歌いながら、一人の少女が視界に入り込んできた。

色素の薄い髪を二つに括った少女である。前髪が煙る貌はこれまた白く、その直中に鎮座する双眸のみが、血のように赤く色づいていた。

身長は一四〇センチ半ばといったところだろうか。確か肉体年齢は一七、八であったは

ずだから、同年代の少女たちと比べてもかなり小柄である。体格に見合った手足は細く、何の冗談でもなく触れれば折れてしまいそうに見えた。

しかし。彼女がその深窓の令嬢の如き華奢な身体に纏っているのは、都市防衛の任を帯びていることを示す純白の制服と、大仰な肩章で飾られた外套であった。

——天河舞姫。

シノは、確認するようにその少女の名を思い浮かべた。

そう——防衛都市神奈川序列第一位・天河舞姫。

この都市の中で、最強を誇る少女の名を。

——シノが殺さねばならない少女の名を。

「ふんふふーん」

シノがじつと観察を続けていると、舞姫が鼻歌を続けながら、肩掛けにしていた外套を脱ぎ、ハンガーに掛けた。次いで、制服のボタンを順に外していく。

きつと、部屋着に着替えるつもりなのだろう。ジャケットを脱ぎ、ネクタイを緩め、シヤツのボタンに手をかける。

「……………」

シノは目を見開くと、姿勢を低くして通気口の金網に顔を近づけた。

それはそうだ。こんな至近距離で天河舞姫の裸体を目にできる機会など、そうはない。とはいえ、シノの頭の中にある思考は、一般的な思春期の学生が抱く感情とは少々異なっていた。

「……………上腕、前腕、ともに平均未満。あの腕であの臂力。信じられん」

シノは、舞姫に勘付かれないくらいの声で、ブツブツと呟いた。

「あつ、忘れてた」

そんなシノの存在にまったく気づいていない様子でシャツとスカートを脱ぎ捨てた舞姫は、不意にそんな声を上げると、下着姿のままクローゼットの方に歩いていった。

「……………」

シノは、視線を鋭くしてそれを見つめた。舞姫の胸（というか胸筋）や、お尻（の下から伸びる大腿筋の動き）を。

舞姫はクローゼットに頭を突っ込むと、しばしの間もぞもぞしたのち、中から一着の部屋着を取り出し、ベッドの上に広げた。

「ふんふふーん」

そして、鼻歌を再開させ、ブラジャーのフロントホックに手を掛ける。

「——おお」

シノは思わず身を乗り出した。  
すると、その瞬間。

「……ん？」

手を突いていた場所からミシ、という音がしたかと思うと、次いで金網を留めていた金具が外れ、シノはそのまま舞姫の目の前に落下した。

「わっ!？」

突然のことに、舞姫が素っ頓狂な声を上げる。

だがそれも無理からぬことだろう。何の前触れもなく自分の部屋に人が一人落ちてきたのだ。

「……………」

シノはそんな舞姫に反して、落ち着き払った様子で姿勢を正した。

無論、まったく動揺してはいないかといえはそんなことはない。相手は都市最強の戦士である。対応を誤れば命はなかった。

しかし、動揺を相手に気取られるのは悪手である。狼狽えるシノは舞姫に気づかれぬように呼吸を整え、何事もなかったかのように表情を取り繕った。

「な、何してるの……?」

舞姫は未だに混乱が収まらない様子で言ったのち、ハッと目を見開いて部屋着を手に取り、自分の身体を覆い隠すように肩をすばめた。どうやら、一拍おいて自分が半裸状態であることに気づいたらしい。すぐに、顔がかあつと赤くなる。

「待て。落ち着け」

シノは表情を変えぬまま、舞姫を制するように手を広げた。

そして、淡々と言う。

「道に迷った。気づいたら通風口に出ただけだ。やましいことは一切ない」

すると舞姫は、キョトンと目を丸くしたのち、

「——なんだ、そっかあ」

心底ホッとした様子で、はあと息を吐き出した。

「まったく、気を付けないと駄目だぞー。いきなり落ちてきたら驚くし、危ないし」

「すまない。今後は注意する」

「ん。……あ、出口そっちだよ」

「ああ。では」

シノは小さくうなずくと、そのまま立ち上がり、ゆっくりとした歩調で部屋を出ようとした。

と、シノが部屋の扉を開けると、今まさに部屋に入ろうとしていたらしい眼鏡の少女と出くわした。

「きゃっ」

突然、ノックしようとしていた扉が開いて驚いたのだろう。少女が小さな悲鳴を上げる。  
「失敬」

シノは短く言うと、少女の脇を擦り抜けるようにして廊下を歩いていった。

少女はしばしの間呆然としていたようだったが……すぐに後方から、舞姫と会話を交わすのが聞こえてくる。

「あ、あの、今のは……」

「ああ、うん、道に迷って通気口に出ちゃったんだって」

「ええと……その格好は？」

「ん？ 着替えようと思って。それより、この金網直るかな？ ネジ外れちゃってるけど」

「いや、あの、たぶんそれって……」

「え？」

それから数秒後。

バサバサツという荒つばい衣擦れの音がしたかと思うと、すぐに、後方から顔を真っ赤に染めた舞姫が走ってきた。

「待て。落ち着——」

「うがああああああああああああっ！」

舞姫は猛獣のような叫び声を上げると、シノの顔を殴り付けた。

「ん……」

次に目を開けたとき、視界に飛び込んできたのは、見慣れた部屋の天井だった。

「あ、起きた？」

響いてきたのは、これまた聞き覚えのある声音である。目をやると、そこに髪を一つに括った少女が座っていることがわかる。

凜堂ほたる。シノと同じく、この神奈川に派遣されたエージェントである。

「ほたる」

「よかった。記憶は残ってるみたいね」

シノが名を呼ぶと、ほたるが冗談めかした調子で返してきた。

ゆっくりと身を起こす。妙に痛む頬に手を当てると、そこに分厚い湿布が確認できた。

「だから無茶だつて言ったのに。やっぱり、不用意な接近は危険よ」

ほたるが、糾弾するような調子で言ってくる。そういえば、ほたるは最初から舞姫との接触には反対姿勢を取っていた。

確かに彼女の言うことももつともである。否、それどころか通常であれば最適解といつてもいい。

しかし、今回の仕事においては、その常識は通用しなかった。ゆっくりと首を横に振る。ほたるがやれやれとため息を吐いた。

「死んでも知らないわよ」

「そう言うな。それだけの収穫はあつた。やはり至近距離での観察は必須だ。それに――」

「それに？」

ほたるが首を傾げてくる。シノは、頬に貼られた湿布を押さえながら言葉が続けた。

「やはり、奴は自分の秘密を知られることを極端に恐れている。そしてあの攻撃性――危険な人物であることに間違いはないようだ」

「うーん……と」

シノが大真面目な顔で言うのと、ほたるはなぜか頬に汗を垂らした。

## 序章／2 ヒメとほたる

——よくわからないけれど、どうやら世界は終わるらしい。

見たことのない色に染まった空の下で、少女が二人、臨海公園のベンチに座って水平線を眺めていた。

辺りに人の姿はない。それはそうだ。いつ『敵』が攻めてくるかわからないこの状況で好きこのんで外を彷徨く人間なんて、火事場泥棒か夢遊病者くらいのもだろう。

まあ、別々の避難所に収容されてしまった恋人たちが、逢瀬のために危険に身を晒すなんてことがないとも限らなかったけれど。

実際、ヒメとほたるの二人も、前の二つよりはそちらに近かった。

「——ほたるちゃん」

「ん、なに、ヒメ」

ヒメが名を呼ぶと、ほたるは静かな声で応えた。

でも、ヒメは次の言葉を発せなかった。別に、何か言いたいことがあったわけではなく、ただ、自分の隣に、ほたるがいるという証明が欲しかっただけなのだ。

ほたるはそれを察したように微笑むと、ヒメの手に自分の手を重ねた。

「静かだね」

ほたるが、海を眺めながら言ってくる。ヒメはこくと首を倒した。

「……うん」

慌てふためく人々とは正反対に、海は大きな波もなく、静かに風いている。幾度となく二人で見た景色そのままに。

二人落ち合う場所にここを選んだのは、いつも遊んでいたからという単純な理由であつたけれど、もしかしたら心のどこかで、そんな海の景色を最後に見ておきたいという願望があつたのかもしれない。様変わりしてしまった世界の中で、この眺望だけは前と変わらぬ顔を見せてくれると思つたから。

「こうしてると、今起こっていることが嘘みたい」

「そうだね。……嘘なら、よかつたのに」

ヒメが言うのと、ほたるは手を握る力を少しだけ強めた。

ヒメもほたるもまだ幼い。実際、今世界に何が起こっているのかを詳しく知っているわ

けではなかった。

否。それどころか、今の状況を正確に把握できていない人間なんて、この世に一人もいないのではないか。

ただ、今の世界が、二人の知っているものとは違うものになってしまったということだけは、なんとなく理解できていた。

今からおよそ三年前の六月。世界に『敵』が現れた。

それが何者かはわからない。どこから現れたのかもわからない。見たことのない生き物が、見たことのない機械に乗って、街を滅茶苦茶に破壊したのだ。

偉い人たちは何やらその『敵』に難しい名前をつけていたようだけれど、結局〈アンノウン〉なんて俗称が一般化してしまった。

最初はどこかの国が未知の兵器を使って敵性国家を攻撃したのでは、なんて考えが支配的だったらしいが、各国がそんな議論に熱を上げている最中も〈アンノウン〉は気まぐれに現れ、破壊の雨を降らせていった。

結局、各国が手を取り合ったのは、容疑をかけられていた主要国家の軍事施設が、粗方被害を受けたあとだった。

とはいえ、それを間抜けと罵ることもできない。宇宙人だとか異世界生物だとかが攻めてきただなんて荒唐無稽なことを、立場のある人間がそう簡単に口にするはずがない。だが、人類はもう認めざるを得なかった。常識の枠外にいるものが、敵意を持って己の前に現れたということ。

果たして、宣戦布告も開戦の詔勅もなく、世界は『よくわからないもの』との戦争を余儀なくされた。

そしてそれに当たって、老人や子供などの非戦闘員をコールドスリープさせて地下シエルトーに収容しようという計画が持ち上がったのだ。

人体の細胞を破壊しない安全安価なコールドスリープ技術、そしてそこからの蘇生技術が確立したのは今からわずか五年ほど前のことであったが、まさかこんなにも早く活躍の舞台が巡ってくるとは、当の技術者も思わなかったろう。

いつどこに現れるかわからない未知の敵を相手取る戦争だ。確かに地下に避難していた方が安全であるし、眠らせていた方がコストもかからない。効率的な方法ではあった。

だが、冷凍保存されるのが怖くないかと言われれば嘘になるし、そもそも未知の敵相手に、シエルトーが十全の役割を果たすかどうかさえもわからなかった。

小学生の二人にとってそれは、今生の別れに思えて仕方なかったのである。

だから、コールドスリープを明日に控えた今日この日、ヒメとはたるは避難所を抜け出

して、ここにやってきていたのだ。

「明日……かあ。やだなあ」

ヒメが言うと、ほたるが困ったように眉を八の字にした。

「仕方ないよ。私たちは戦争の役には立てないから」

「そうだけど……なんで私だけ別のシェルターなんだろう。ほたるちゃんもマリちゃんも一区なのに」

そう。子供全員を一つのシェルターに収容することは不可能であるため、必然的にいくつかの施設に割り振られることになるのだが……ヒメとほたるは別の場所に収容されることになってしまったのである。ヒメの不安は、コールドスリープそのものよりも、それに対しての方が大きかった。

もしも（アンノウン）の攻撃で、どちらかのシェルターが破壊されてしまったら、ヒメはもうほたるたちと二度と会えなくなってしまうのである。

「ほたるちゃんと一緒じゃないと……怖いよ」

「大丈夫だよ。ヒメは強い子だから」

「強くないよ。私、ほたるちゃんがいないと」

震える声で言うと、目からはぼろぼろと大粒の涙がこぼれ落ちる。ヒメの方が少しだけ

お姉さんなのに、いつもこうだ。ヒメは右手の甲でごしごしと目を擦った。

「大丈夫」

ほたるは、重ねた手をきゅつと強く握ると、ヒメの肩にもう片方の手を当て、ヒメを自分の方に向かせた。

「きつと……ううん、絶対、また会えるから。大人の人たちが、（アンノウン）なんてやつつけてくれるから」

「本当？」

「本当だよ。私がヒメに嘘ついたこと、ある？」

「……ううん」

ヒメは首を横に振った。ほたるが、ニッと微笑む。

「戦争が終わったら、またここで会おう」

「うん……絶対だよ？」

「うん。約束」

言って、ほたるが小指を差し出してくる。

ヒメは、それに応ずるように小さくうなずいてから、同じように小指を伸ばし、ほたるの小指に絡ませた。

## 第一章 剣の都市の姫

「畜生……なんだってこんなことに——！」  
少年は、悲鳴と怨嗟の混じった声を上げながら、絶望で醜く飾り立てられた景色を見つめていた。

少年の周囲には、二名の仲間と——目算で五〇を超えるであろう異形の生物が存在していたのである。

身の丈三メートル近い巨大な体躯。人の胴回りほどあるうかという太い腕と、それに對して細い足。体表は金属とも樹脂ともとれない不思議な物質で覆われており、人間でいう頭部にあたる箇所には、前衛芸術家が戯れに作ったオブジェのようなものがついていた。

一応人型と言えなくはない形をしているのだが、そのアンバランスなシルエットは、極端なデフォルメを施されたカートウーンのキャラクターを思い起こさせた。

そのような異様な生物が、地球の生態系に含まれるはずはない。

第一種災害指定異来生物——〈アンノウン〉。

今からおよそ二九年前、突如として世界に現れた正体不明の『敵』である。

「くそッ、何が美味しい場所だよ！　こんな聞いてねえぞ！」

「うるせえ！　元はと言えばおまえがポイント稼いでえつていうから……！」

「止めて！　そんなことしてる場合じゃないでしょ！」

少女が悲鳴じみた声を上げて制止してくる。少年はぎりと奥歯を噛みしめ、こちらの様子を探るように展開した〈アンノウン〉たちを睨み付けた。

だが、〈アンノウン〉がそんなことで怯んでくれるはずはなかった。何やらキィキィという音を、身体はどこから発しながら、ゆっくりゆっくりと距離を詰めてくる。

この耳障りな音は、〈アンノウン〉同士が意思疎通を図る際の鳴き声のようなものだと言われている。

恐らく、算段をしているのだ。——少年たちをどう処理するかの。

「ぐ……」

少年は、震える手で武器の柄を握った。

——本来、こんなことになるはずではなかったのだ。

湾岸防衛都市の一つである神奈川学園に所属する少年たちは、独立遊撃隊として活動していた。

とはいえ、進んで危険を冒そうだなんて覚悟があつたわけではない。東京湾ゲートから現れる本隊とは別に、時折沿岸部にまばらに現れる〈アンノウン〉を狩ってポイントを稼ぎ、学内ランクを上げるのが目的だったのである。

今日の仕事も、いつも通り終わるはずだった。

観測されていた〈アンノウン〉の数は、一般的な人型——オーガ級が五体。対して彼らの遊撃隊は一〇名。油断さえしなければ、そう難しくもない相手である。

だが、彼らが沿岸部に現れた〈アンノウン〉と交戦している間に、いつの間にかその一〇倍近い数の〈アンノウン〉に、辺りを取り囲まれていたのだ。

そして、瞬く間に隊の仲間七名が、〈アンノウン〉に捕獲されてしまった。

確証はないが——恐らく少年たちは、罠にかけられたのだ。

〈アンノウン〉たちが、キキキキキ、とノイズのような音を発する。まるでそれは、少年たちを嘲笑っているかのようだった。

「——舐めんじゃねえぞ、化物がああああッ！」

少年は怒声を発すると、手にした武器を振りかぶった。長い柄の先に殴打用の鉄塊がついた、いわゆる戦棍型の出力兵装である。

首筋に意識を集中させる。そこを起点として、全身の回路に力を流し込むイメージ。

少年は地を蹴ると、目の前に立っていた〈アンノウン〉の眼前まで飛び上がり、戦棍を振り下ろした。

瞬間、戦棍から光が迸り、〈アンノウン〉の肩口を盛大に抉る。〈アンノウン〉が、悲鳴を上げるように甲高い音を発した。

「どうだ、見やがつ——」

少年は吐き捨てるように言おうとし、言葉を止めた。

一体を仕留めた少年目がけて、左右から〈アンノウン〉が迫っていたのである。

「危ない！」

ドン、という衝撃とともに、少年は前方に突き飛ばされた。一拍おいて、背後にいた少女が、少年の背を押したことがわかる。

「あ——」

〈アンノウン〉の手から、何やら粘性の物質が射出され、少女の身体を包み込む。少女はしばしのあいだ藻掻いていたが、すぐに昆虫の繭のように動かなくなった。

「この……！」

少年は立ち上がると、再び武器を振り上げた。が、その瞬間、戦棍の柄頭に粘性の物質が射出され、少年の手から武器を奪う。

「あ、あ……」

〈アンノウン〉が、少年に迫る。

少年は、震えた声を発してその場に膝を突いた。

——が、次の瞬間。

「え……？」

少年の視界を何かが一閃したかと思うと、少年に迫っていた〈アンノウン〉たちの身体に斜めに線が入り、そのまま綺麗に二つに分かれた。

否。少年に迫っていた個体のみではない。少年たちを囲うように展開していた五〇体あまりの〈アンノウン〉が、一瞬にして全て撫で斬りにされていたのである。

「な、なんだ……これ……」

瞬きの間に築かれた〈アンノウン〉の亡骸の山に、少年は目を丸くするしかなかった。

「……………」

海岸沿いに建てられた監視塔の上で。

遙か遠くに見える〈アンノウン〉が全て沈黙するのを確認してから、紫乃宮晶は手にし

た刀型の出力兵装を翻した。

一瞬、鏡のように磨かれた刀身に、自身の相貌が映り込む。

コールドスリープ期間を除いた肉体年齢は一七歳程度であったはずだが、剣呑な視線のためか身に纏う雰囲気のためか、少し年上に見られることが多かった。己を睨み付けるかのような鋭い双眸に、堅く結ばれた唇。あまり手入れをしていない伸ばしつばなしの前髪がそれを覆い隠そうとしていたが、それが逆に、木々の合い間から顔を覗かせる鬼か何かを思い起こさせた。

「お見事、シノ」

聞き慣れた声音が、シノの鼓膜を震わせる。

後方を見やると、そこに一人の少女が立っていることがわかる。背にかかると、髪の毛を一つに纏めた、優しそうな風貌の少女である。シノに倣って遠方を眺めていたのか、手に厳つい双眼鏡を携えていた。

「どうでした先生、手応えのほどは」

少女——ほたるが冗談めかすような調子で言ってくる。シノは小さく息を吐くと、刀を鞘に収めた。チン、という乾いた音が、辺りに響く。

「別に、いつも通りだ」

「うわー、格好いい。言ってみたいなーそういう台詞。」

「……………」

「怖い顔しないでよ。一応褒めてるんだから」

ほたるが肩をすくめながら言ってくる。

別に怖い顔をしたつもりはなかったのだが、彼女の目にはそう映っていたらしい。シノは自分の固い頬に触れるようにしながら踵を返した。

「あ、もう帰る？」

「仕事は終わった。長居する必要もないだろう。それに——」

シノが言いかけたところで、ほたるが「ああ」とうなずいた。

「そういえば金屋課長から通信が入ってたね。また任務かな？」

「だろうな」

言いながら、ちらと左方を見やる。「ゲート」から現れる〈アンノウン〉を監視するために建造された監視塔からは、辺り一帯の様子を一望することができた。

とはいえ——それはあまり美しい景色とは言えなかった。

何しろ、周囲に広がっているのは、滅茶苦茶に破壊された都市の残骸だったのだから。

巨大な建造物や何台もの車両を一緒くたにしてミキサーにかけ、辺りにばら撒いたかの

ような惨状である。縦横に走った道路は、最低限の移動、輸送に使う箇所だけが優先的に修復されていたが、大部分は手つかずのままだった。もしも怪獣映画のセットでこんなものを作ったなら、仕事が雑に過ぎると監督からお叱りを食らうに違いない。

「この辺の復興、全然進まないね」

シノの視線から思考を察したのだろう。ほたるが心苦しうに言ってくる。

「終戦からもう二一年よ。もうオリンピックやっててもいいくらいじゃない。なのに」

「仕方あるまい。何しろ人手がない。——『敵』も、まだ出てくるしな」

はあ、とほたるがため息を吐く。

「ねえ……日本って本当に、勝ったのよね？」

「……………」

ほたるの言葉に、シノはしばし無言になった。

今から二一年前、日本を含む先進各国は、多大に過ぎる被害を出しながらも、〈アンノウン〉を撃退することに成功し、八年に及ぶ最悪の戦争を、一応の勝利で終えることに成功した。

史実では、そう言われている。

だからこそ、コールドスリープ施設で眠っていた非戦闘員——子供だったシノたちが目

覚めさせられたのだ。

しかし、相手は意思疎通さえできていない正体不明の生物である。開戦の合図なく始まった戦争に、終戦の約定などあるはずもなかった。

人間同士の戦争には、どんなに理不尽であろうと必ず理由と、言い訳のための大義、そして落としどころが存在する。詰まるところ、人間の戦争は——少なくともそれを先導する指導者たちにとっては——政治であり経済活動なのである。

だが、〈アンノウン〉にはそれが無い。

あつたとしても、人間には理解ができない。

『終戦』というのも、二一年前から〈アンノウン〉の攻撃が激減したことを受けて、人類側が勝手に宣言を出したただけだった。

事実、それを示すように、本格的な侵攻が終わったあとも、ちらほらと〈アンノウン〉は現れているのである。

また、『勝利』——というのも空々しい言葉ではあつた。当時の人類の言う『勝利』とは、あくまで〈アンノウン〉に国土を奪われなかったことのみを示す言葉であり、一般的な戦争におけるそれを表すものとは言いがたかつたのである。

日本国内の死傷者、推定三二〇〇万人。

国民の四半近くを失った壊滅状態を『勝利』と呼んだのは、そうでもしなければ残された人々の心が耐えられなかったからではないかと邪推してしまうシノではあつた。

「——勝つたに決まっている」

だが、シノは強い口調でそう返した。

「二九年前、愚かしくもこの国に、世界に戦争を仕掛けた〈アンノウン〉は、当時の大人たちによって撃退された。——私たちがしているのはただの残党狩りであり、不埒な侵入者の排除だ」

「そつか。……うん、そうね」

シノの言葉に、ほたるが首肯する。

凜堂ほたるは頭のいい少女である。シノの巡らせた思案など、幾度となく反芻しているに違いない。だが、彼女は何も言い返してはこなかった。——シノがほたると同じように、幾度とない思案の果てに、その言葉を吐いたのだと悟つたからだろう。

シノとほたるはそれきり言葉らしい言葉も交わさず監視塔を降りた。



都市間列車に揺られることおよそ四〇分。シノは南関東管理局に辿り着いた。

その名の通り、南関東を統括する、臨時政府直轄の組織である。(アンノウン)出現のホットスポットである東京湾ゲートから日本本土を防衛する、東京、神奈川、千葉の三都市を管理しているのだ。

「――来ましたか」

よく通る声で、金屋はシノとほたるを部屋に迎え入れた。

歳の頃五〇歳くらいのも、眼鏡をかけた大柄な男である。顔や身体の随所には凄絶な戦歴を物語る傷がいくつも刻まれていたが、その粗暴な武人然とした風貌とは裏腹に、所作や言動からは理知的な雰囲気は滲み出ている。

金屋久秀。二九年前に起こった未曾有の大戦争を戦い抜いた戦士であり――シノたちが所属する『物品管理四課』を取り仕切る課長である。

とはいえその部署名は、課の活動内容を正確に示しているとは言い難かった。

シノたち四課の主な仕事は、防衛都市の生徒たちでは対応しきれない案件の解決や、通常の治安維持活動から外れた超法規的処理――要は、表に出せない裏仕事である。堂々と『特殊部隊』の看板を掲げるわけにもいかないため、適当な部署名が付けられていたのだ。

「は」

「何かご用でしょうか、課長」

シノとほたるが短く問うと、金屋は小さくうなずいてから一枚の写真を取り出し、執務机の上に置いた。

「これを」

「拝見します」

一言断ってから写真を手に取る。

そこに写っていたのは、一人の可愛らしい少女だった。まだあどけなさの残る相貌に、色素の薄い髪。細い首は、療養所に入院している病弱な少女を思わせた。

しかし、彼女が纏っていたのは病衣ではなく、純白に金色のボタンが輝く制服であった。それは間違いなく、湾岸防衛都市の一つ、神奈川のものである。

「この少女は……」

シノは微かに眉根を寄せた。この少女の顔に、見覚えがある気がしたのである。

それに答えるように、金屋が口を動かす。

「君たちも、名前くらいは知っていますでしょう。――神奈川第一位・天河舞姫です」

「やはり」

その名を聞いて、シノは得心がいったようにならずいた。

防衛都市内には教師など、最低限の大人が住んでいるが、その人口の九割以上は一八歳以下の学生であり、その自治もまた、学生たちの手に委ねられている。

その中であつての序列一位。それはつまり、この少女が一つの都市の頂点であることを示していた。

「……ほたる？」

と、そこで、シノは不意に隣に立ったほたるの方に視線をやった。

金屋に写真を示されてから、なぜかほたるは一言も発さずそれに視線を注いでいたのである。

「……！ な、なに？」

「こちらの台詞だ。どうかしたのか」

「ううん……何でもない」

言つて、ほたるが首を振る。

「……………」

まったく気にならないといえはうそになつたが、本人がそう言っている以上追及しても仕方あるまい。シノは視線を金屋に戻した。

「それで。その天河舞姫がどうかしましたか」

とはいえ、何となく予想は付いていた。

金屋の口から名が出るということは、恐らくこの少女が首席権限を悪用して何か後ろ暗いことに手を染めているのだろう。

学生自治という歪なシステムで以て運営されている防衛都市においては、そう珍しいことでもない。肥大化する自己顕示欲と、それを実現に移せるだけの力を備えてしまった子供に、自分を律しろというのはあまりに酷である。実際、要職に就く生徒たちの内務調査は、シノたちの主な任務の一つだった。

運営資金の横領、軍用品の横流し、権力を笠に着ての私刑……主なものはそんなところだろうか。過去の派手な事例としては、どこから手に入れたのか麻薬を売買していたり、地下に賭博場を作った者までいたらしい。

写真を見る限り、悪事に手を染めるような少女には見えなかったが——歪な環境は人の心を容易く歪ませる。そういう意味では、彼女も先の戦争の被害者なのかもしれないなかつた。

とはいえ、少なくともシノの記憶の範囲内では彼女が調査の対象になつたことはなかつたはずである。よほどのことをしていない限り、初犯は嚴重注意で済むだろう。

しかし。

「紫乃宮晶一等執務官、及び凜堂はたる二等執務官に指令を下します」  
 金屋の口から発された言葉は、シノが予想だにしないものだった。

「――神奈川第一位・天河舞姫を、暗殺せよ」

「は……」

「……………」

シノは訝しげに眉根を寄せた。隣から、ほたるが息を呑む音が聞こえてくる。

「暗殺？ どういうことですか」

「言葉の通りです。君たちには、天河舞姫を亡き者にしていただきます。手段は問いません。無論、我々の関与が疑われない方法がベストですが」

金屋が、ぴくりとも表情を変えないまま淡々と続ける。シノは金屋を制止するように手のひらを広げた。

「お待ちを。理由をお聞かせください」

ジツと金屋の目を見据えるようにしながら言う。普段は指令に異議など唱えないシノではあったが、さすがに事情が違った。

それはそうだ。シノたちの仕事は多岐に亘り、中には決して綺麗とは言えないものも含まれている。しかし、それらは全て本土に住まう人々や管理局、そして前線で戦う少年少女たちのためのものであったのだ。

――暗殺。しかも、一都市の頂点である少女を。

それがどれほどの意味を持ち、防衛戦にどれほどの影響を及ぼすのかは、誰にでも容易に想像が付くだろう。それが金屋ほどの人間にわからないはずはない。

だからこそ、シノは問うたのだ。

それを理解した上でシノたちに暗殺指令を下した意味を。

防衛都市の要である第一位の少女を、殺すに足ると判断した事由を。

しかし。金屋はゆつくりと首を振った。

「残念ながら、それは特秘事項に指定されています。君たちには知る権限がありません」  
 静かに、しかし重く。金屋が言葉を発する。

金屋は戦前の大人。つまりシノたちと違い、頭の中に〈世界〉を持たない常人である。実際に切り結ばば、一瞬で勝負は付くだろう。だがそれを感じさせない有無を言わせぬ気遣いとプレッシャーが、彼の一挙手一投足から滲み出ていた。

「ですが」

「君の仕事は、私に意見をするのではないはずです」

「……………」

金屋の言葉に、シノは細く息を吐いたのち、姿勢を正して敬礼を示した。

「……紫乃宮晶一等執務官、了解しました」

金屋の言うとおりである。シノの仕事は、指令を忠実にこなすことであり、その指令は既に上の人間が協議した結果下されたものなのだ。

シノたちに善悪を判断する必要はない。手足が頭の思考に反して動いてしまつては、組織はやがて自壊してしまふ。

「あっ……凜堂はたる二等執務官も、了解です」

シノに倣うように、ほたるが同じように敬礼をする。それを見てか、金屋が大仰にうなずいた。

「よろしい。二人には生徒として神奈川学園に編入していただきます。編入用の偽造書類は既に用意してあるので、あとで頭に入れておいてください。——では、武運を」

「はっ」

「はいっ」

シノとほたるはもう一度敬礼をすると、執務室を出ていった。



「ふああ……」

防衛都市神奈川の執務室で、天河舞姫は眠そうなくびをした。

時刻は一七時。一日の修学カリキュラム及び技能修練を終えた放課後である。本来ならば都市内にある喫茶店の新作ケーキで舌を甘やかそうとしていた舞姫だったのだが、たまりにたまった残務の処理がそれを阻んでいた。堆く積まれた書類に、べったんべったんと判を捺していく。

書類を作成したのは舞姫ではないし、内容のチェックも事前に優秀な部下が済ませてくれているので、舞姫は承認の判子を捺すだけなのだが……何しろ数が多い。諸々の予算の承認に、高ランク生徒の先行卒業希望の確認、都市内店舗の出店許可エトセラエトセラ。単純作業は眠気を誘う。途中から、自分が人間なのか全自動スタンプ押し機なのかわからなくなってくる舞姫だった。

と、舞姫が幾度目かのあくびをしたところで、コンコン、と執務室の扉がノックされる。

「……ふぁーい」

タイミング悪くあくびとミックスされてしまった声で言うと、扉の向こうから聞き知つ

た声が返ってきた。

『八重垣です』

「ん、入っ正しいよ」

『失礼します』

扉が開かれ、眼鏡をかけた女子生徒が部屋に入ってきた。髪を肩口くらいで切りそろえた、どこか気の弱そうな少女である。身に纏っている制服は舞姫と同じく神奈川の制服だったのだが、舞姫のそれよりも少しスカートが長かった。

「どうしたの、青ちゃん……って、あ」

舞姫は入室してきた少女——八重垣青生に目を向け、すぐに洗面を作った。

理由は単純。青生の手に、分厚い書類の束が確認できたからである。まだ机の上の書類も処理しきっていないのに、まさかのおかわりだった。

「ええ……また増えるの？」

「すみません……でも天河さんに承認していただかないと受理できない案件なので……」  
別に彼女が悪いわけではないだろうに、青生は申し訳なさそうに頭を下げた。

「う……」

そんな風に行われると、なんだか悪いことをしている気分になってしまふ。舞姫は手を

ヒラヒラさせると、はあとため息を吐いた。

「ん……わかった。そこに置いていって」

「はい、お願いします」

言って、青生がこくりとわずく。舞姫は凝り固まった背中中の筋肉を解すように大きく伸びをした。

「ん……」

「あはは……お疲れみたいですわね。——ちょっと休憩しましうか。実は、いいものがあるんです」

「いいもの？」

舞姫が身体を弛緩させて青生に目を向け直すと、青生は書類の後ろから白い紙製の箱を取り出してきた。——舞姫が巖屑にしている喫茶店のロゴが入った、お持ち帰り用の箱を。

「わっ！ えっ！ なんで!?!」

舞姫が目を見開いて机に身を乗り出すと、青生がうふふと微笑んだ。

「天河さんが楽しみにしていたと伺ったので……余計なお世話だったでしょうか？」

「まさか！ 青ちゃん愛してるう！」

身を振りながら舞姫が言うとう、青生は少し恥ずかしそうに頬を染めて苦笑した。

「せっかくだからお茶を淹れましょう。ちょっと待っていてもらえますか？」  
 「うん！ 待ってる！」

力強くうなずき、姿勢をピシッと正す。すると青生はそんな舞姫の様子を微笑ましげに見てから、ポットとカップが置かれている棚の方に歩いていった。

舞姫はしばしの間、頬を紅潮させながら、「待て」をされた犬のように椅子に座っていたが、すぐにハツと肩を揺らすと、その場に立ち上がった。

そして、執務机とは別に部屋に置かれていた、名目上応接用、実質ティータイム用のテーブルの上を片付け始める。

「あ、すみません、天河さん」

「ううん、青ちゃんはお茶お願い」

「はい、心得てます。ミルク多めですよね」

「わかってるう」

冗談めかして言いながら、テーブルを布巾で拭く。

そして程なくして、遅めのティータイムが展開されることとなった。

「へえー、メロンケーキ？ 綺麗だねー」

綺麗なライトグリーン果肉が載ったショートケーキを矯めつ眇めつしてから、フォア

クで一口大の大きさに切り分け、口に運ぶ。すると優しい甘みと仄かな酸味が口の中いっぱい広がった。

「んー！ ふふー」

思わず笑みがこぼれてしまう。向かいのソファを見やると、青生も同じような顔をしているのが見て取れた。

「美味しいなあ。いやー、凄い。昔食べたのと比べても遜色ないよ。たぶんだけど」

舞姫はうんうんとうなずいた。まあ、昔のケーキの味をそこまで鮮明に覚えているわけではなかったのだけれど、このクオリティであれば、舌の肥えた戦前の人間もきつと満足するに違いなかった。

実際、舞姫が学園に配属された一〇年前には、都市で手に入る甘い物などキャンディやキャラメルくらいのもので、生菓子などほとんど出回っていなかった。このような嗜好品や娯楽品が都市内に充実しつつあるのは、小さいが確かな復興の証ということができた。

「千葉の食料プラントでも、徐々に果物の種類が増やされていますからね。今月から、内地に残っていた苗を取り寄せて、ブランドフルーツを作り始めるそうですよ」

「へー、それも楽しみだね」

舞姫はそう言って、ミルク多めの紅茶を一口啜った。

湾岸三都市は、〈アンノウン〉から内地を守る防衛拠点であると同時に、それぞれ別の役割を持った都市でもある。千葉にある巨大食料プラントなどは、東京の中央会議場や神奈川の出力兵器製造施設と並んでわかりやすい例だろう。製造の難しい加工品などの一部は未だ内地からの輸入に頼っているが、農作物や畜肉などの食料は、大半が千葉のプラントで賄われていた。それどころか近年は、余剰分を内地への輸出へ回しているという話だ。「にしても……」

舞姫は横目でちらと執務机の方を一瞥した。

「最近は何んでもあんなに書類多いの？　なんか年々増えている気がするんだけど……」

「まあ、それも都市が活性化してきている証拠ですよ。都市内のお店もどんどん増えてますし。それにほら、今度また編入生が配属されるみたいですよ」

「編入生？」

舞姫は目を丸くして首を傾げた。

〈アンノウン〉の本格的な侵攻が終わったあと、舞姫をはじめとする子供たちは確かにワールドスリーブから目覚めさせられた。だが戦後の荒廃した日本で子供たち全員の食料や居住施設を賄うことは困難であったため、まだ日本の地下深くには、何人もの子供たちがかつての姿のまま眠りに就いているのである。



基本的に防衛都市の人員補充は、都市運営に余裕ができた際、施設単位でコールドスリープが解除され、目覚めた子供たちがそれぞれの都市に配属されるのが一般的だった。

まあ、そのせいで昔は同い年だった子が、いつの間にか年上や年下になっていたりする事体が頻発するのだが。

「ええ。昨日チェックしてもらった書類に書いてありませんでしたか？」

「え？ あ、えっと、うん、書いてあった、気がする……」

舞姫が曖昧に返事をする、青生は「え？」と聞き返してきた。

数秒の間、会話がなくなる。舞姫は顔にだらだらと汗を垂らすと、止めていた息を吐き出しながら頭を下げた。

「……ごめんなさい嘘つきましたあんまり見てませんでした……」

「あ、いや、別に謝らなくてもいいですけど……」

青生が困ったように苦笑する。

「できるだけ目を通していただけると助かりますけど、数が数ですからね。一応私がチェックして、問題ないものだけを回してるので大丈夫ですよ。でも、今度から重要度の高い案件のものを上におくようにしますね」

「……いつもお世話になってるです」

さらに深々と頭を下げながら言うと、青生は「いえ、そんな」と首を振った。

「でも、こんな時期に珍しいねー」

「そうですね。でもごく希にあるんですよ。コールドスリープ装置の不調で、まだ目覚めさせる予定じゃなかった人が目覚めてしまうってケースが」

「ふうん……そっか、編入生か」

舞姫はそう言うと、キーキをもう一口ぱくりと口に放り込んだ。



「紫乃宮晶です」

「凜堂ほたるです。よろしくお願ひします」

そう言って、シノとほたるは教室に居並んだ生徒たちに頭を下げた。二人を歓迎するよ

うに、ぱちぱちと拍手が鳴り響く。  
金屋から天河舞姫暗殺の指令を受けてから三日後。シノとほたるはつつがなく編入手続きを済ませ、クラスに配属されてきたのである。

湾岸防衛都市の一つ・神奈川。

西暦二〇四九年現在でただ『神奈川』といった場合、それはかつての都道府県区分では

なく、旧横浜市跡に存在する城塞都市のことを示す。

少年少女の修学及び戦技教導を行う巨大な学園施設を中心として放射状に広がった、人口一万人程度の『城』である。

都市の西側に広がった工業施設では休みなく湾岸防衛の必需品である出力兵装を製造しており、都市間列車を通じて東京や千葉など他の都市に供給されていた。曰く、南関東の武器庫である。

シノたちが配属されたクラスは二年D組。防衛都市におけるクラスとは、単なる区分けではなく、戦闘時の小隊区分となっている。教室に居並んだ面々は級友であると同時に、背中を預け合う戦友ということができた。

とはいえ、皆十代の少年少女たちである。時期外れの編入生に興味津津なのだろう。朝のホームルームが終わると同時、ほたるの周りにはあつという間に人垣ができていた。

「凜堂さんたちってどこから来たの？」

「編入生なんて変わってるよねー」

「ねえねえ、彼氏いんの？」

などと、わいわいと世間話が始まる。

「ええと、私は——」

一応、ほたるはシノと同様に偽装した経歴を用意していたはずだが……捲し立てるようなクラスメートの質問の嵐に圧倒され、曖昧な返事しか返せていないようだった。

しかし、それとは対照的にシノの方は静かなものである。

一応、興味深げに様子を窺ってくる生徒はいたのだが、シノがそれを察知して視線を返すと、なぜか皆、目を逸らしてしまっていた。不思議である。

と、そんな中、一人の背の高い男子生徒が前の席に腰掛け、シノの机に肘を突いてきた。「よう編入生。そんなに周りを睨み付けてちゃ、誰も寄ってこねえぞ？」

「……………」

別に睨み付けてなどいないのだが……どうやら周りからはそう見えたりしない。

「注意する」

「へっへ、まあそれも味ってもんか。——俺は杉石ってんだ。ようこそ神奈川へ。歓迎するぜ。ともに姫様の下、戦おう」

「——姫様？」

杉石の言葉に、シノはびくりと眉を動かした。

「ん？ ああ、悪い悪い。神奈川の第一位、天河代表のことだよ。あだ名みたいなもの

「nx

「……なるほど」  
 「都市首席ってのは都市の顔だからな。俺も、配属されたのが神奈川で本つつっつ当に良かったと思うよ。鼻持ちならねえ東京とかド田舎ヤンキーの千葉になんか配属されてたらと思うとゾツとするぜ。いいか、おまえもあいつらにだけは絶対負けんじゃねえぞ」  
 「そういうものか」

東京も千葉も、敵から国土を守る同志であるはずなのだが……よく考えてみれば、同じ国の軍でも、陸海空軍はそれぞれ仲が悪いという話を聞いたことがある。闘争心を保つためには、そういった対立関係もある程度は必要なのかもしれないなかつた。

「そういうもんだ。なんつったって関東圏の個人戦績ランキングは、常に姫様が一位だからな。格が違うのよ格が。いっぺん模擬戦で戦ってみりゃわかるが、姫様の強さはもう別次元だ。それにかわいい。ちようかわいい。うちの姫様が一番かわいい」

腕組みしながら杉石が言う。

「……………」

と、そうこうしているうちにすぐに始業のチャイムが鳴り、生徒たちが席に着き始めた。杉石も「おっと」と言い、軽く手を振ってから自分の席へと戻っていった。

神奈川は、敵の攻撃から国土を守る防衛都市であると同時に、生徒たちを育てる教導施設

設でもある。戦闘技能の訓練の他に、座学や一般課程の授業も行われており、その点は戦前の学校とさほど変わらなかった。

教室の扉が、ガラガラと音を立てて開かれる。授業のため教師がやってきたのだろう。だがその瞬間——教室にざわめきが広がるのがわかった。

「……!? な——」

一拍遅れて、シノもその理由に気づく。

教室に入ってきたのが教師ではなく、制服の上に外套を羽織った、小柄な少女だったのだ。

二つに括られた色素の薄い髪。それに負けないくらい白い肌。おおよそ戦いに耐えられるようには見えない体軀に宿るのは、しかし強い意志の光を宿した双眸である。

——そう、それは。

神奈川第一位、都市首席・天河舞姫その人であった。

「えっ、姫様!？」

「どうしたんですか、こんなところに!」

生徒たちが目を見開き、にわかに騒ぎ出す。すると舞姫が皆を落ち着けるようにパンパンと手を叩いた。

「はい、落ち着いて。今日の限、命気操作でしょ？ 今日特別に、私が講義をしにきちゃいました！」

言つて、腰に手を当て胸を反らしてみせる。

その言葉に、生徒たちが驚いたように目を剝いた。

「姫様が!? すげえ、なんで!？」

「マジかよ、超レアじゃん!」

教室が色めき立つ。基本、授業は教師が教鞭を執るのが普通であるが、命気操作や出力兵装の扱いなどは、〈世界〉が見えない大人たちには教えることができないため、上級生や戦績の高い生徒が講師を務める場合が多かった。しかし、それに都市首席が出張つてくると、そうあることではない。生徒たちの驚きも無理のないことだった。

しかしそれを考えたとしても、舞姫の人気は凄まじいものがあった。まるでアイドルか何かが見れたような様子である。

「……………」

沸き立つ教室の中。シノはジツと舞姫を見つめていた。まさかこんなにも早く標的を間近で見られるとは思っていなかった。無論こんなところで行動を起こす気はないが、相手を観察するにはこの上ない好機である。

と、シノが舞姫の動きに注意を払っていると、舞姫がキョロキョロと辺りを見回し始めた。

「このクラスに編入生が来たって聞いてさ。ちよつと気になっちゃったんだ。どこにいるのかな?」

「……………」

シノは小さく手を挙げた。すると、舞姫がニツと微笑んでくる。

「君か! 私は天河舞姫。よろしくね! これから一緒に頑張ろう!」

「どうも」

シノは曖昧に返事をし、小さく頭を下げた。その際ちらとはたるの方を見やしたが、なぜか顔を伏せるようにし、目立たぬよう息をひそめているのがわかる。標的に顔を見せたくないという考えかもしれないが…逆が目立つような気がしないでもなかった。

しかし、シノという編入生を見つけた舞姫はそれに気づく様子もなく、教科書を開いて言葉が続けた。

「編入生ってことはスリープ明けなんだよね。〈世界〉についてはどれくらい知ってるの?」

「基礎程度は」

シノは短く答えた。

〈世界〉。

それは、字面通りの意味を表す言葉ではなかった。

シノたちがそれまでの常人と異なる最も大きな点。生徒たちはそれぞれ、見えている〈世界〉が異なるのである。

ある者は、空を歩くのが普通である〈世界〉を。

ある者は、触れたものが融解するのが普通である〈世界〉を。

ある者は、人間以外の生物と会話できるのが普通である〈世界〉を。

それぞれ、当然のように、頭の中に持っているのだ。

シノがその概要を簡単に述べると、舞姫は満足げにうなずいた。

「うん。そして私たちは、頭の中の〈世界〉で当然のように行われている事象を、現実世界に再現することで、普通では有り得ない現象を起こすの」

チラチラと教科書を覗きながら、舞姫が続ける。

「えっと、一説によれば〈世界〉は、コールドスリープ中に見た夢が起因してるっていう話もある……って、あ、そうなんだ！」

舞姫が驚いたように声を発する。その様子に、生徒たちが苦笑した。

「姫様……知らなかったんですか？」

舞姫は恥ずかしそうにあははと笑うと、「……今の、先生にはナイシヨね」と指を一本立てた。

「ふーん……なるほど。でも、頭までカチコチにされてたはずなのに、どうやって夢を見ただらうね、私たち」

舞姫が素朴な疑問を発する。すると、生徒の一人が声を上げた。

「夢見た状態で凍らされたから、それがそのまま固定されちゃったんじゃないですかね」

「あー」

「でもそれなら俺、綺麗なお姉さんと組んずほぐれつする夢でも見ておきたかったなー」  
別の生徒が冗談めかすように言う。男子生徒が笑い、女子生徒が「うわあ」という顔を  
作った。

舞姫はあははと笑ってから、気を取り直すように咳払いをし、シノに目を向けてくる。

「まあ、でもそれだけ知ってるってことは、〈世界〉を再現したことはあるんだよね？」

「何度かはー」

「うん、優秀優秀。一番難しいのは一回目の命気操作だしね。それさえできてれば大丈夫。あ、身体に命気を巡らせるときは、首筋を起点にするイメージを持つとやりやすいよ」

舞姫が軽く身体を後ろに向け、髪を除けてうなじのあたりを示しながら言ってくる。そこには、まるでバーコードのようなマークが記されていた。

とはいえ、それは舞姫に限ったことではない。この教室にいる生徒全員の首に——無<sub>二</sub>論<sub>一</sub>シノやほたるの首にも——同じような文様が見て取れるのである。

管理局によれば、これは生徒たちの〈世界〉再現を補助するためのものらしい。このコードが削られると上手く〈世界〉を再現できなくなることから、戦闘や訓練で傷を付けないように注意せよと堅く言われていた。

「さ、じゃあ今日はその応用についてやろうと思っただけ……なんていうのかな、命<sub>一</sub>気を集中させると、ぎゅんぎゅんって感じがするでしょ？ そのとき、身体全体に巡らせる前にシユビビビって感じにしておく、〈世界〉再現がスムーズになる気がするんだよね」

舞姫が、身振り手振りを加えながら、一応授業と思<sub>二</sub>しき<sub>一</sub>ものを開始する。

生徒たちはその抽象<sub>一</sub>的な表現の解釈に若干手間取っていたようだったが、都市首席に教<sub>一</sub>えを請<sub>二</sub>える機会などそうないとわかっているためか、一生懸命その話<sub>一</sub>に聞き入っていた。

「……………」

だがそんな中シノは一人、舞姫の一举手一投足に気を払いながら、机の下で携<sub>一</sub>帯端末を操作していた。

「——ほたる。少しいいか？」

一限目の授業が終わり、生徒たちに惜しまれつつ舞姫が教室から去ったところで、シノはほたるに声をかけた。

「あつ、シノ。——えっと、皆さん、すみません。ちょっと失礼します」

ほたるが、周囲に集まっていた生徒たちにペコリと頭を下げ、シノについて教室を出る。背後から、「何だ、やつぱりデキてたのか……」と何やら落胆<sub>一</sub>したような声が聞こえてきたが、シノはあまり気にしないことにした。

しばらく二人で廊下<sub>一</sub>を歩いたのち、ひとけのない場所で足を止める。

「取り込み中に悪かったな」

「ううん。むしろちょっと助かったかも。——それで、話<sub>一</sub>って、天河舞姫のこと？」

ほたるが、少し声のトーンを落とすように言ってくる。

シノはびくりと眉の端<sub>一</sub>を動かした。なぜだろうか。指令を受けたときも思ったのだが、ほたるが『天河舞姫』の名を発するとき、何か妙な感<sub>一</sub>じを覚えてしまうのである。

「シノ？」

「……ああ、そうだ」

シノは小さくうなずいた。

「少し調べてみたところ、幾つか気になる点があった。——まずはその在任期間だ」

「在任期間……って、要は、神奈川のトップに居続けてる年数ってことだよ？ どれくらいなの？」

「一〇年だ」

「は……？」

シノの言葉に、ほたるは目を丸くした。

だがそれも仕方のないことだろう。通常、都市首席の在任期間は一、二年、長くても三年程度だ。

加え、その数字が示すのはそれだけではなかった。

「一〇年って……仮に天河舞姫の肉体年齢が一七だとして、七歳の頃から戦ってたってこと!？」

「そういうことになるな」

都市機能を司る運営部は、管理局から派遣された都市担当官と、試験で選ばれた生徒たちによって構成されるが、都市の象徴たる都市首席は、純粋な戦績のみで決定される。要

は、官僚と首相のようなものだ。

防衛都市は初等部・中等部・高等部から成るが、基本的に防衛戦に参加するのは高等部と一部の中等部生徒のみで、初等部は訓練と修学が主な活動だ。無論、都市首席となるのは通常、高等部二、三年の生徒が主である。

だがデータを信じるのであればあの少女は、七歳の時分から戦場に立ち、当時の中等部・高等部生徒の都市内ランクを抑えて首席を務めていたということになるのである。

「い、一体、どんな〈世界〉を見てたらそんなことになるのよ……!」

ほたるが、顔を戦慄に染める。

しかし、それも正常な反応だろう。生徒たちの能力は、見ている〈世界〉によって異なるが、僅か七歳で都市の頂点に立った少女が一体どんな壮絶な〈世界〉を見ているかだなんて、シノには想像もつかなかった

「ていうか、一〇年って、それだけやってたらもうとつくに……!」

「ああ。天河舞姫の実績は何年も前に最高位に達している。最恵待遇の内地入りが可能だ。実際、管理局から幾度も要請は行っているらしい」

防衛都市に配属された生徒たちは、卒業と同時に臨時政府が治める内地に転属することになる。

いわば訓練兵である生徒たちに前線を守らせ、せっかく成長して力を付けた卒業生を、比較的ひかくてき安全な内地の防衛に転属てんじつさせるといふシステムに歪ひびきを感じないかといえば嘘うそになつたが……まあ、中央のお偉方えらかたはよほど（アンノウン）が怖いこわのだろう。閑話休題かんわきゅうだい。生徒たちは、卒業までにどれだけの実績を残したかによつて、転属の際の待遇たいぐが変わるのである。

都市首席を務める、というのは非常に大きな実績であり、事実、歴代の首席たちは実績ランクが最高に達した瞬間しゅんかんに早期卒業を希望する者がほとんどであった。

「だが、天河舞姫は十分すぎる戦果を残した今も、管理局からの要請を断り、最前線に残り続けている」

「な、なんで……？」

「さてな。偏執的な戦闘狂せんしやくまきやうなのかもしれないし、何か内地に行きたくない理由があるのかもしれない。もしくは——」

シノは一拍置くいつぱくようにしてから続けた。

「何か、別の目的があるのかもしれない」

「別の目的……」

ほたるが、緊張きんじやうにごくりとのを鳴らす。シノは「ああ」とうなずいた。

「いくら内地入りの要請を断っているとはいえ、その程度の反抗はんこうで暗殺指令など下るわけがない。その『目的』の内容に、天河舞姫を殺さざるを得ない理由が含まれているとしか思えんな」

「……た、たとえば？」

ほたるが頬ほおに汗あせを垂らしながら問うてくる。シノはあごに手を当てて考えを巡らせた。

「そうだな。たとえば——クーデターの画策」

「え……ええっ!？」

ほたるが驚愕きやうがくに染まった叫びさけを発する。シノは落ち着け、と手のひらを広げた。

「あくまでたとえはの話だ。——だが、それくらいの理由がなければ、問答無用で殺せなごという指令は下るまい」

「……………」

強ばつた顔こゝろをしながら、ほたるがうなずく。その表情は、今さらになって任務の重要性を再認識さいにんしきしたようにも見えた。

「とにかく、まずは情報だ。私たちは天河舞姫について、この都市について、あまりに知らないことが多すぎる」

「うん……でも、どうやって調べる?」

「それについては考えがある。放課後、また話をしよう」

「え……？ う、うん」

ほたるが首肯すると同時、二限目の開始を示すチャイムが校舎内に鳴り響く。

修学は戦闘訓練と並んで学生の義務である。編入早々無意味なボイコットをして悪目立ちをすることは避けたかった。

「行くぞ」

「うん」

シノとほたるは、教師がやってくる前にと、教室へ戻っていった。